

## 化学教育兵庫サークル会報

## 第32号

目次	(1) 巻頭言	1頁
	(2) 第32回研究会内容	2頁
	(3) 97-77 やってみました 透明石鹸をつくる (承前)	3頁
	(4) 研究会詳細資料 遊び実験あれこれ	4~5頁
	(5) ケニヤ事情の一端	6~14頁
	(6) マレーシア通信最終号	15頁
	(7) 次回(33回)研究会案内	16頁
	(8) ChEC Eyogoの参加案内	18頁
	(9) 編集後記	18頁

## 少年時代の心

兵庫県立尼崎北高等学校 秋山 菊

「化学は難しい」という生徒の声をよく聞きます。本当は自然の不思議、驚き・感動を伝えたいのですが、現実はいつものまにか習題ばかりを教える授業になってしまっています。ChEC Eyogoの会報を読むと、そんな悩みに答えてくれるような様々な取り組みが紹介されています。今回、研究会に参加させていただき、その会報の裏側を見せていただきました。先生方の自然科学を本当に楽しもうとされているその勢いに刺激させられました。新聞は理科の話から雑学まで幅広く、面白い実験のネタがあると皆さん少年の日になって挑戦されます。私もワクワクして先生方の紹介された取り組みを模倣しようと思いました。その気持ちを大切にして、学校に戻ったとき生徒たちに伝えたいと思っています。少年時代の心を持参して、また次の研究会に臨みたいと思います。

## 【第 3 2 回研究会の内容】

期 日 平成10年3月14日(土) 14時00分~18時30分  
場 所 神戸大学 発達科学部

参加者 芝崎(武庫川女子), 藤川(市神戸工業), 小西(小野), 池野(小野)  
浅井(尼崎西), 土井(東播工業), 秋山(尼崎北), 吉田(川西)  
寺岡(須磨友が丘), 高田(御子)  
中西(神戸大学大学院生), 川野, 雪海(神戸大学)

【副出席、敬称略】

内 容 簡報・報告・発表の概要は以上の通りでしたので報告します。

## (1) 連絡など

・次回33回研究会日曜について  
4/11(土)

時間、場所 通常通り

・ビデオ編集および配布の方法  
(予定) 5月 編集完了  
8月 理科部会の総会で  
各座各校へ配布

・平成10年度役割分担  
次回の研究会で正式決定します。

## (2) 研究簡報

・進捗実験あれこれ  
寺岡(須磨友が丘)

① 1円電池の分極を防ぐ工夫  
1円と10円硬貨を使い簡単な電  
池をつくる実験はよく知られている。  
このとき、分極によってすぐに電圧  
が下がるが、硬貨の間に挟む紙(食  
塩水をしみこませたもの)を二重  
構造にし、その間に二酸化マンガン  
をはさむことにより分極を防ぐもの  
だった。

② 「弓切り法」により火をおこす  
摩滅により火をおこす実験は、科  
学の祭典等で実施されている。この  
とき大部分は、「弓切り」と呼ばれ  
る方法である。今回は「弓切り」と

呼ばれる方法の紹介で、この方法だ  
と一人だけで行うことができ、約5  
分ほどで火をおこすことができる。  
実際にやっていただき、こんなに簡  
単に火がおこるものかと驚いた。

また、金細とチャート石による手  
製の火打ちの道具もみせていただい  
た。

## ③ 飛行リング

ビール缶を切ってつくった輪が安  
定した飛行をすることの実験であっ  
た。簡単にでき、生徒は熱中して遊  
ぶと感わられた。

①~③どれも簡単だが楽しいものばかりで、ついつい時間を忘れ、ワイワイ  
ガヤガヤと遊んでしまいました。

(4~6頁)

## (3) その他の紹介

・ケニヤ事情の一端

藤川(市神戸工業)

2年前、国際協力事業団(JICA)の探  
察団によりケニヤにいかれていた間の  
色々な出来事、感じられたこと等をま  
とめていただき、それをもとに国際的  
な観や最近の日本の教育などの状況・  
問題点について話がなされました。

(9~14頁)

・マレーシア通信最終号

栗岡(加古川北)

マレーシア政府派遣留学生予備教育  
派遣委員として2年間いかれていた間  
に、22回に渡り通信を発行していた  
できました。その最終号です。

(15頁)

シリーズ やってみました!

透明石鹸をつくる (承前)

尼崎南園高校 谷口真日東

前々号で紹介した、米沢「化学と教育」42, [9]646 に依拠した生徒実験をやってみての記。配合等は指示通り；ただし水ガラスを加えなかったためか色がやや濃く、透明度は1月の例会で快賞した試作品よりも少し落ちる。しかし泡立ち等、使用感は申し分なく、充分実用に耐えると言えるものができたので今回は生徒たちも納得し、筆者自身も、あの配合はいろいろな人たちによってよく検討された結果なのだ、と感心した。

○収量について：あの分量で、ふつうの紙カップの底に厚さ2 mm くらいの石鹸がラックに4人分(1班)できた。

○注意としては、まずは 配合：材料をちゃんと秤量して配合の指示を守ることに。筆者が大まかな配合で試作したら冷水での泡立ちが悪かった。

それと 温度の管理：最初にバーナーを使うとき加熱し過ぎないこと、その後は電気定温器(乾燥機のレベルのものでよいと思う。)を使って指示通りにすることがポイントのようだ。

○材料について：抽脂類は試薬として買うとなると意外に高い。500g が 2000 円ほどで、あの配合だとそのびん1本が10班分でカラになる計算だ(やし油、牛脂とも)。今回はたまたま筆者の前任校—某N高校に、試薬びん入りの牛脂(少なくとも12年以上前のもの)が数本あったので1本秤量したが、原標の著者・米沢氏(現・仁川学園高)は、食肉店等に生脂贈答が手分けして行ってタダでもらってきた牛脂を加熱→キナー→コーヒー用紙フィルターで濾過、という手で用意されたらしい。ちなみに、先生が行くと同じ店でも「有料」を告げられたそう。 (もらおうとした量が多かったため?)

追記。先日、米沢氏から原標の複製(「化学と教育」43, [5]356)の存在や、氏の断を筆者が聞き進めた点などいろいろとご教示いただいた。わが ChEC もそうだが、文書だけでなく直接の交流も大切だということを改めて認識した。(…例会に参加しよう！)

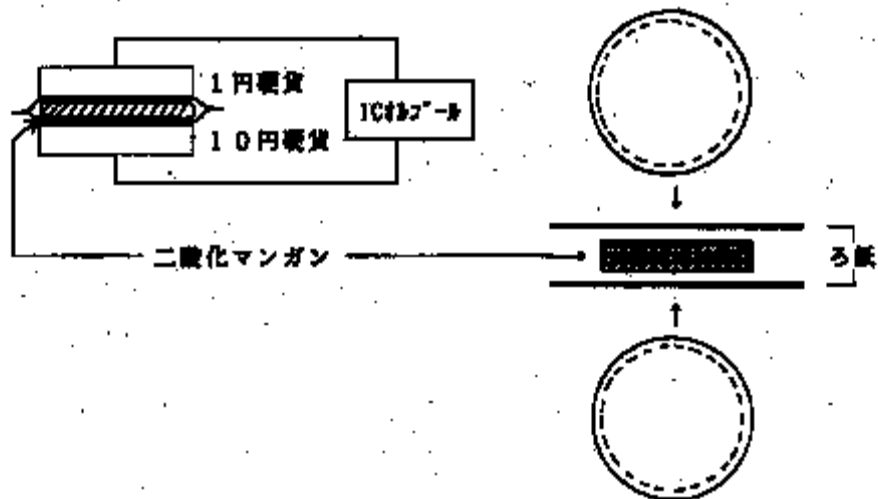
なお、てんぷら等の煎油を使う話も原標にはあるが、今回は、外観も使用感も市販品に大刀打ちでき、かつ香料等の添加物を含まない石鹸を作ることを主目的とした。家庭からの廃油の活用が目的ならもっと手っ取り早い方法がいくつかあることは皆さんご存じのはず。……たとえば、左巻・編「たのしくわかる化学実験事典」に左巻氏の工夫が記載されている。ただ、石鹸を作るのに、材料としていくらかの粉石鹸を加えるというこの方法は、実験としてはともかく、授業でやるには少し教育的でない感じがして筆者個人好みには合わない。授業でもコロイド化学の中でやる実験としては塩析をする常法の方が本法よりもよい訳で、要は目的に応じて使い分ければよいと思う。

(もちろん、今や「化学」にこだわらず実験に踏み出すべきだ、という批判もあるだろう。)

遊び実験あれこれ

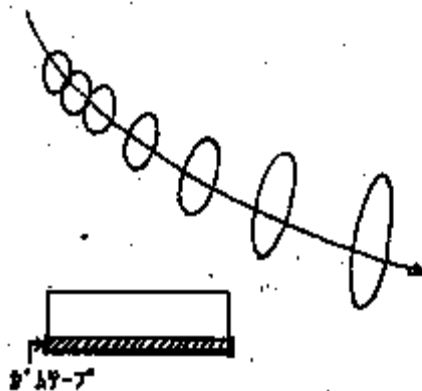
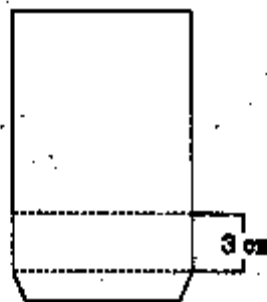
寺岡 一夫 (須磨友が丘)

● 1 1 円電池の分極を防ぐ工夫



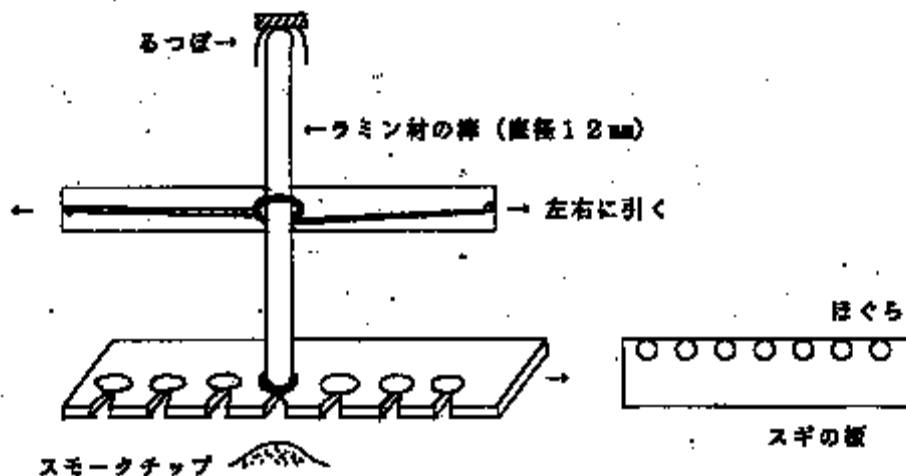
● 飛行リング

ビール缶



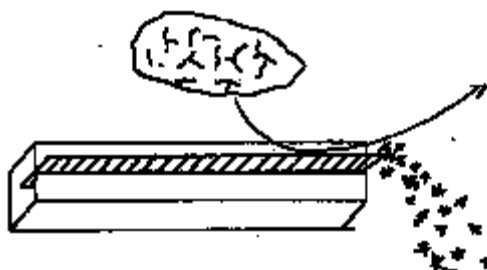
PETでもできます  
(推奨)S'が1.5(t)

## ●「写切り法」により火をおこす



(注) コツは煙が出だしてから繰り返し20回をいかに集中して行うかです。

## ●金船とチャート石による火打ち



### 究極の化粧品を求めて 活躍するバイオ技術

技術・研究  
開発

人間の皮膚は、約200μm-3mm厚いという厚さにもかかわらず、驚くほどの弾力性、柔軟性を保っている。その秘密は、皮膚の細胞が持つ「細胞外マトリックス」の働きにある。この細胞外マトリックスは、どのような化粧品でもなくてはならない成分で、肌の弾力性を保つてくれる。

この細胞外マトリックスの働きを、バイオ技術によって再現することによって、肌の弾力性を保つてくれる化粧品を開発することが可能になる。



化粧品



化粧品

バイオ技術が化粧品に活用されることで、肌の弾力性を保つことが可能になる。

肌の弾力性を保つことが可能になる。

## ケニア事情の一端

1. はじめに
2. 人口、面積、気候、位置
3. 歴史、人種、部族
4. 教育システム
5. 政治
6. 経済
7. 一般(?)市民の生活
8. サファリ
9. 国際協力事業団(JICA)の派遣専門家として
10. おわりに



1997年12月

神戸市立神戸北高等学校  
国際協力事業団(JICA)  
派遣専門家(環境科教官)

池川 勝三

## 1. はじめに

1年余りのケニア生活の中で、分かったこと、感じたこと等を述べる。事實に反することがあるかも知れないが、ここに述べていることの多くは客観的に述べたつもりである。一つ問題に出会う度に、一つショックな出来事に遭遇する度に、少しづつケニアに対する理解が深まっていったように思う。最初、ケニアのごく一部しか知り得なかったように思うが、ケニア関係の友人、ケニアに在住の日本人、NGO(非政府組織)、青年海外協力隊員、などの方々と実際に話し合えたことこそが、大きな開眼となった。今、この経験をまとめるに当たって、見聞きしたことすべてを伝えることが不可避であることを実感している。そして、これを読むだけでは理解困難と思われる部分が少ないことも自覚しているつもりであるが、お祈りしたい。

## 2. 人口、面積、位置、気候

- ① 国名: ケニア共和国 (Republic of Kenya)  
 ② 独立年月日: 1963年12月12日  
 ③ 面積: 54万2645km<sup>2</sup> (日本の約1.6倍)  
 ④ 人口: 約2,750万人 (首都ナイロビは約135万人)  
 ⑤ 位置: アフリカ大陸の赤道中央部に位置し、ソマリア、エチオピア、スーダン、ウガンダ、タンザニアの5カ国とインド洋に囲まれている。  
 ⑥ 気候: 年平均約20℃(ナイロビ) (国のほぼ中央を赤道が通っているが高度が1700m) 北東部(エチオピア、ソマリア国境部)~半砂漠気候、南東部(インド洋に面している地域)~熱帯性気候、南西部(タンザニア国境部)~サバナ気候、西部(ウガンダ国境部)~半森林気候、雨季: 大雨期(4~6月)、小雨期(10~11月)、しかし、海拔1,000m以下の内陸平原地帯や北西部では殆ど降らない。乾季: 雨季以外をいい、暖かいイメージがあるが、ナイロビの冬(7~1月)は寒い。曇りがちの日が続き、朝夕は和風、昼間でもセーターを必要とする日が多い。



※ ジャカランダ: 9~12月にかけて晩夏に咲くこの花は素晴らしい。鮮やかな紫色で青を帯び、日本の桜の像。

## 3. 歴史、人種、宗教

17世紀から19世紀にかけて、オランダやポルトガルは貿易品としてトンゴ玉を大量生産し、アフリカに持ち込んだ。これらの人達宝石や象牙・タバコ・武器などでアフリカの財宝と奴隷を買い集めた。当時のアフリカ人は喜んでこのガラス玉と本物の金や宝石とを交換した。

19世紀に入り、ヨーロッパの列強がアフリカに進出。ケニアは、1920年から正式にイギリス領となり、多くの白人移住者によって「ホワイト・ハイランド」と呼ばれる大規模な農地開拓が行われた。

1895年から始まったモンバサ(ケニアの貿易港)~カンバラ(ウガンダの首都、ビクトリア湖)間の鉄道建設に伴い、35,000人余りのインド人が英領人の手によって連れて来られ、工事終了後もケニアにとどまり、農工業や商業の分野で権力を握るようになっていった。しかし、彼らインド人は母国に帰ることはない。何故なら、彼らが母国に帰れば、パインヤ(平島)・スードラ(奴隷)の生活が待っているからであって、決して、バラモン(祭司・僧侶)・クシャトリア(王族・武士階級)にはなり得ないからである。

1952年以降、キクユ族の「マウマウ団闘争」(マウマウ:キクユ語で「白人に対して出て行け!」)に端を発した強力な独立運動が推進され、1963年12月12日、代表議会が選挙で占めたケニア・アフリカ人民党(KANU)が独立を勝ち取った。

しかし、独立後は初代大統領ムゼー・ジョモケニアック(キクユ族)の一党独裁制度で「キクユでなければ人間でない」的発想もあった。現在も種族差別制ではあるが実質、モイ(カレンジン族)大統領の独裁である。やはり、人事異動等でもカレンジンは優遇されているように見える。

前は変わるが、ムオウ族を除く殆どの部族で現在も、「割礼」の儀式が行われている。新聞紙上で時々問題にもなっているが、これが死で済む気になったり、ひどい場合には命を落とすこともある。また、男子の場合これが「成人としての証」でもあるようで、これを行わずにボーディングのセカンダリースクールなどへ進学して、衆生活の中で周囲にそのことが分かると「いじめ」に合ったりもする。また、見聞するところによると、ムオウ族は、割礼の代わりに初婚を1本(1)抜き、カレンジン族は割礼もし、前歯も抜くようである。

## 4. 教育システム

## 1) 旧システム

- ① 独立前：独立以前のケニアの教育は、制度・構造・内容・設備の全般にわたり、人種間的な性格のものであった。当時、欧米・アジア人の人口はケニア全人口の約3%に過ぎなかったが、植民地時代の教育は、その少数のヨーロッパ人、アジア人のためのものであった。アフリカ人の大多数はヨーロッパ人に利用されるため、搾取されるための産物の学校に送られた。ヨーロッパ人の専断は教育だけに留まらず、社会的、経済的にも相当なものであったらしい。例えば、1954年までは1人のアフリカ人も立法評議会に選ばれなかったし、その他の職階（銀行、工務、税関）のポストに就くことも許されなかった。また、当時の教育はヨーロッパ人キリスト教伝道師による一方的な宗派的教育が殆どであったようである。

～1963年 8-4-2制（Primary 5年、Secondary 4年、Senior Secondary 2年）

- ② 独立後：独立の年、1963年、植民地政策による貧困・無知・病氣など、国の抱えていた問題を解決すべく、教育における調査委員会、Ontado Commissionが設置された。この委員会の目的は、以下の通りである。

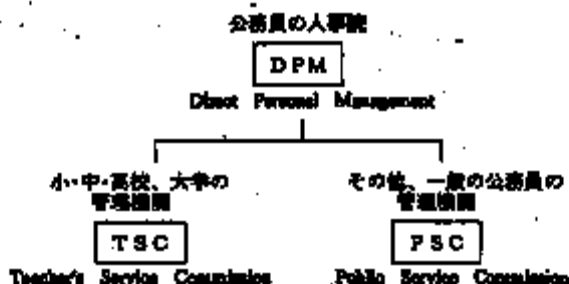
- 1) 教育は、国民性、国民統一を促進しなければならない。
- 2) 教育は、すべてのケニアの人々、莫望に差別なく受けなければならない。
- 3) 公立学校は、宗教に關係なく中立でなければならない。しかし、学校はいかなる人々のいかなる宗教をも尊重しなければならない。
- 4) 学校は、文化的伝統、また、人々を尊重しなければならない。
- 5) 過激な学校内での競争は、ケニアの伝統的信仰に反するため、避けるべきである。学校に来るすべての生徒は、進歩のための重要な人材であるということを確認すべきである。
- 6) 教育は、自給的進歩への変化、子供たちの新しい世界への適応性を育成するための手段でなければならない。同時に、人間性も促進されなければならない。
- 7) 教育は、国の発展の必要性を促進しなければならない。
- 8) 教育は、社会的・経済的・宗教的隔たりを無くさなければならない。
- 9) どのレベルにおける教育においても、最終的ゴールは変化に対する適応性でなければならない。

この調査委員会（Ontado Commission）を元にして新しい教育制度が導入されたが、上記の目的にもかかわらず、制度そのものは独立前と殆ど変わらなかった。

～1986年

7-4-2-3制（Primary 7年、Secondary 4年、High School 2年、University 0年）

また、公務員の所属機関構成は以下のようになっている。



当 TSC 所属機関の職員は、PSC の方が、逆に、PSC 所属機関は TSC の方が、職員を管理する特権が強いと感しているように感じました。NYS (National Youth Service 青年奉仕隊) は PSC 所属機関であるため、NYS 技術年俸 (ケニアでの最高俸) も PSC に所属している。

## 2) 現在

1985年～ 8-4-4制 (Primary 8年、Secondary 4年、University 4年)

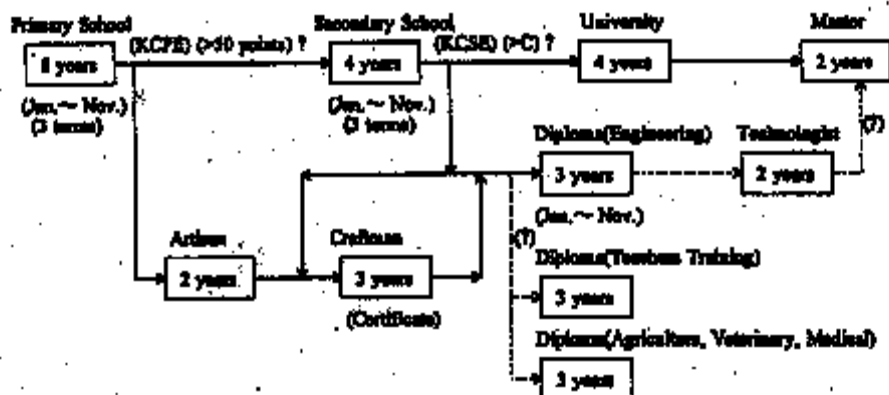
新制度における教育目標は下記の通りである。

1. 国の発展のための教育
2. 国の統一のための教育
3. 生活に密着した、実践的な教育
4. 技術的・職業訓練的トレーニングの重視
5. 自己独立能力の育成

- ・技術系 (理数科・農林を含む?)  
および職業訓練を重視。
- ・卒業生の雇用拡大を目標。

## ケニアの教育制度の概要

## Education and Training Programs Linkage



上図から分かるように、 $\rightarrow$  がいわゆるエリートコースで、小学校・中学校終了時の国家試験 (KCPE (Kenya Certificate of Primary Education), KCSE (Kenya Certificate of Secondary Education)) の成績によって決められる。印象としては、それらの試験でほとんど入国にかけられ、そこから挽回はできない、という感じである。その為、両国の中には地方に比べて教育施設の充実したナイロビ市内で教育を受けさせたい、と願う者も少なくない。事実、本年度も地方の子 (生徒) にとっては見たこともない試験、試験、などが試験期間に出題された。しかし、ナイロビ内外を問わず、学校に行ける環境が整っていない子供達も決して少なくないのが現実なのである。

他年頃から、 $\rightarrow$  の検討がなされているようだが未だ明確な進展を見ない。

## 表. ケニアと日本の教育制度

	<ケニア>	<日本>
	6-7才	6-7才
Primary School	1 2 3 4	1 2 3 4
Standard	5 6 7 8	5 6 7 8
※ 義務教育ではない	9 10	9 10
Secondary School	1 2 3 4	1 2 3 4
Form	1 2 3 4	1 2 3 4
University	1 2 3 4	1 2 3 4
Year	1 2 3 4	1 2 3 4
		小学校 中学校 高等学校 大学 学生 (履修)

## 3) 現状と問題点

先にも述べたが、小学校は義務教育ではなく、教科書代、検閲試験代、などが払えないために学校を失う子供が少なくないようである。私が尋ねた田舎の小学校では、「それらのお金が無い家庭のためにハランベ（寄付金）を募り何とか回っている」と校長の Mr. Mwangi さんから聞いた。その小学校では、給食は全く自宅へ食べに帰る。昼休みになると教師の子を欺らしたように聞かなくなる。しかし、貧困は自宅に帰っても何も食べるものがない家庭が多いのである。セカンダリーに進学すると親類は更に窮乏になる。現金収入のない家庭に奨学金は払えない。教育は一般、基礎の教育科を Day School (通学制) と Boarding School (全寮制) 別に設けている。ところが、実際はあまりそれに沿っていない。テレビのコマーシャル(約8分)で「女の子も学校に行かせてあげて」というのがあるのも現状の一部を映している。

ケニア青年海外協力隊(通称科協隊)が組織する KESTES (Kenya Students Education Scholarship) が 1983 年来、奨学金制度を独自に運営し、セカンダリーの生徒で成績優秀にも関わらず経済的事実によって学校を去らなければならぬという生徒を救ってきている。その中には、現在セカンダリーの校長になっている人もいる。

## 4) 問題

20 年程前までは、小学校の教科書は政府から無償供与されていたが、その資財でさえ、3 人で 1 冊の教科書を使うのが唯一だったようである。

大統領選挙に当たり前になっている袖の下や風俗の腐敗政治を一掃し、憲政教育制度を確立して欲しいと願っている。

また、当たり前のことではあるが「教師の視点と生徒の視点である」ということがキヌム・プロジェクトの調査・分析で明らかになり、自分自身にも再認識させられた。教員の再編成の場が必要である。

## 5) 先進国外國の誘わり方

アジアには「日本-西アフリカに遠い国」という誤解を感じるし、実際、既にそうなっている地域もある。しかし、ここケニア(他の殆どのアフリカ諸国)は違う。そもそも「国」などという概念も無く、のんびりと暮らしていたであろうこの地に、勝手に土足で踏み込んだのはイギリスをはじめとする先進国外國である。奴隷半賣をだまし取り、自分勝手なリゾート-観光地化に努め出し、今度は外交と言論攻撃の利益が薄んだ国際力が見え隠れする。「一体この国をどうしようというのだ」と思う時もある。アメリカが言うように「一旦ここで全盤的-能力を中絶し、引き捨てて様子を見る」のが見いのかも知れない。少なくとも現在のケニアは、莫大の援助が有りように「2020 年に新興先進工業國入りを目指す」国ではない。誰が見ても農業立国を目指すべきであろう。それを支える為の工賃力なら国は分かる。その方が失業率問題の解決にも近道となる筈である。

ケニア化してみれば、植民地時代に生産工程の一部ずつしか輸入して(見せて)もらえず、決して一人で全体を把握できないように仕込まれ、仕込まれたところが、独立後もそれを踏襲してしまっている。こんな状態では工業立国への道のりもまだまだ遠いと思わざるを得ない。

## 5. 政治

政治制度は大統領内閣制。大統領を含む総選挙が 5 年に一度行われる。(1997 年 12 月 29 日) 総議員数は 121 名。内閣 14 名は大統領が指名する。主な政党は、KANU 党、Ford Kenya 党、D.P. (Democratic Party) 党、S. (Social) D.P. 党、N. (Nation) D.P. 党、Safina 党、Ford Kenya 党、Saba Saba Aathi 党、Ford Aathi 党。絶えず選挙権の時運に依りながら、新たに党ができてたり、つぶれたりしている。投票は、すべて開票の直接投票制で、①大統領、②国会議員、③市会議員、の 3 種類がある。国会議員は 5~7 名のカウンセラー(市会議員)を持っている。例えばナイロビ地区でいうと、国会議員が 8 名、その下の市会議員が計 71 名である。

## 6. 経済

主要産品は農産。コーヒー、紅茶が主な輸出品目。やはりインド人が経済においても力を振舞っており、国内での反響も強い。独立直後から 1972 年のオイルショックまでの約 10 年間は、順調な経済成長を遂げたようだが、コーヒー、紅茶の国際価格下落によって国際収支は悪化。1979 年からの 3 年間で実質経済成長率は鈍化した。1980 年代からは世界銀行、IMF (国際通貨基金) との協力で経済構造調整政策を実施しており、現在は比較的安定。

ケニアは独立以来、一貫して輸入額が輸出額を上回っており、この赤字幅は年々増大する傾向。海外旅行客からの観光収入増加に力を入れることによって、かなり解消されている。しかし、その為に行方不明な情報も十分知らされず、毎年、情報不足による犠牲者を出している。

## 7. 一般(7)庶民の生活

## 1) 収入

ケニア警察の額によると新採用の警官で月給 3,000ksh (ケニアシリング：日本円で約 6,000 円(97年4月現在))で28年勤めたベテランでさえ 8,000ksh だという。しかも、公務員の給料は毎月のように遅延される。半月遅れなどは珍しくない。そのため、警官の「袖の下」も日常化している。NYS 技術学院のスタッフも 6,000 ~ 7,000ksh から始まり校長で 14,000 ~ 15,000ksh ほどの収入があるようであるが、それらはジョブ・グループ (職階級) で決められている。

これまでも有力のあるスタッフは民間会社や他の機関への転職でステップアップを果たしている。そこでは、月収 25,000 ~ 40,000ksh も可能のようである。それが叶わない他のスタッフは、彼等もそこそこ懸命に物を出すのが常態とされている。

さらに、自宅のアパート敷地内で働く雇用人の一人は、毎月肉運く朝から晩まで本道によく働くが日給 100ksh (換い雇用人雇戻付)。

## 2) 物價 (97年10月現在)

新聞：25ksh(月～土)、30ksh(日) (10月1日から、それぞれ3kshずつ値上げ)

卵：12個入り、90ksh

肉：牛ミンチ、1kg、225ksh

牛肉(54%), 1kg、475ksh

豚肉(54%), 1kg、575ksh

牛乳：1リットル、30ksh

野菜：ジャガイモ、1kg、15ksh

キャベツ、1kg、30ksh

ピーマン、1kg、90ksh

キャベツ、1kg、25ksh

ニンジン、1kg、75ksh

砂糖：2kg、90ksh (ローカルシュガー：茶色)

塩：1kg、12ksh

小麦粉：2kg、90ksh (中力粉のよう)

バター：45g、125ksh

灯油：1kg、17ksh

など。(店や場所(スラムとモール等)で値段はかなり違う)

## 3) 水道・電気・電話事情

**水** ナイロビ市内の水量は数年前の検査で、一応、飲み水として問題ないとされている。

自分自身の庭園からも水にあたっては問題はない。

ナイロビ、マンバセ等大きな街を離れると水道などはなく、川や池、水たまりの水を求めて往復時間も掛く。これは主に子供の仕事のようにである。一部のトタン屋の屋根を停っている家では、雨水をタンクに溜めて利用している。

今年の小雨期は、異常気象(エルニーニョ現象?)により大雨が続いた。しかし、雨水を溜めておくダム等が不十分なため、水不足解消にはなりそうもなく、むしろ、家を無くす等の被害だけが目立ったという印象である。

**電気** 自宅はあまり停電する事もなく嫌ごしたが、地域によっては毎日のように何時間かの停電があったり、一日のやでも数回に渡るケースもある。特に、雨期の停電は多い。また、自動車用のバッテリーを上手く利用する人も多い。寿命は短い100 ~ 200ksh で充電してくれるところは稀な数ある。

田舎の家を尋ねたが、どの家でも貴重な電燈を使ってラジオをにかけてくれた。暗くなるのを待って、ランプを灯してくれた。外も月の光で人の顔まで見えることもあった。空気がそれだけ暖んでいるせいかもしれないが、月も星も非常に綺麗で、電気の無い家で夜は外の方が明るい。

**電話** 電話は確かに便利な代物である。しかし、ここケニアでは娯楽のために、一週で済むことは少ない。電話1本かけるのに30 ~ 40分位はそれ以上かかることも珍しくないことではない。電話局側の責任による回し中、間違ひ電話等も頻発。また、電話料金を支払っているにもかかわらず、買られることもある。その旨、問い合わせても対応は早くない。

公共電話は一応使える。1リットルを2 ~ 3枚以上、または、3リットル、10リットル1枚以上を電話機の上に投げるようになっている。しかし、1台目の公共電話で上手く相手と繋がればラッキーである。

## ④ 交通事情

とにかく、ムールが有って、無い、信じられない事故、またその為の渋滞、自分勝手な車のための意味のない渋滞は頻発、臭い車気ガスの為、夜間など前方が見えなくなることもある。車線幅もあるようだが、実際には、ロードライセンス（毎年更新）とインシュランス（保険）の3種のシールがフロントガラスに貼ってあれば問題はない。

社会の純れとは真逆にして、車の速度は非常に速い。番号でも昔から昔になる前にスタートしないと思ろからクラクションを鳴らされる。

夜間は、半分以上の車がヘッドライトを上向きにして走るので非常に眩しい。警備隊の付いた車が、誤作動等を原因に起こし、けたましい音で鳴り響く。夜中に何度もそのサイレンが鳴り、眠れなかったこともあった。あまりにも誤作動が多いため、サイレンが鳴っても誰も気にしない。そのため、車々々車々を避ける距離が離れない。

事故の場合、その状態でお互いの車を止めたまま警官に連絡しなければ後戻りしてもならない。後ろにどれだけ車の列が並んでも構わず、その場ですまぬ。しかし、警官の事故証明をとったとしても（相手に100%過失があっても）支払い能力がなければそれで済んでしまう。また、相手があれば賠償できる自動車保険に加入していても、実際に支払われるのは早くても1年以上も先、または、そのままだま支払われずどうやむやみにされることも多し。特に、相手に政府関係の場合は泣き落としのケースが一般的。たとえ、命を奪ったとしても「無罪死」に過ぎない。早い者勝ち、大きい車勝ち、逃げた者勝ち、強い者勝ち、というのが実態。

## ⑤ ストレス発散と暴発

市民の不満は弱い者へ向けられる。たとえば、街中で御座(スリ)などが群衆に捕まえられ、殴り殺されたり、強姦されたという事件は年間500件を超えるらしい。そのため、たとえ暴れても人を叩いてもその場ですまぬ。そのまますまなままに進行する方が多いとも言われている。日本人とケニア人の共通点かも知れないが「弱い者には強く、強い者には弱い」という感じを強く受ける。とにかく、弱者に対しては残酷なまでに強行な態度をとったり、神や霊が河の淵にもない一般人へ暴言を吐くなど行われていたりする一方で、強者に対しては、まるで借りてきた猫の態度である。

愚痴の度には思っているのは、生活苦と抑圧からくるストレスを発散している彼らの心情である。

## ⑥ ケニアタイム（アフリカタイム）と約束

時間と約束は殆ど守られない、と言えは言い過ぎだろうか。しかし、一度できちんと守られた約束は記憶にない。交通事情、事故発生の頻率の暴走、チャイ（物の下）の横行、国の事情そのものが原因ではあるが、「Tomorrow」「Next Week」に当たりぬ。それが、いくら事前に何度も確認された重要な事件であってもである。

一方、個人的な利益に結びつく事件については、連絡網、準備共に実に早い。信じられないくらいに速く伝わる。

## ⑦ 治安

人によって見方がかなり異なるが、ナイロビ市内に限って言えば、良いとは言えない。自動車の窓が割られているために盗取る、ネックレス、バッグ等のひったくられる事件、向屋であっても一人を強盗で取り囲み、通行を加え金品を奪き上げる等の事件が絶えぬ。

一見平和そうに見える公園でも警察不届の日本人観光客が毎年被害に遭っているようである。風が知る範囲でも取り返しつかない被害がでている。

## ⑧ 愛国心

確かに、ある一定以上の生活が出来ている層の人は別かも知れないが、それ以外では愛国心というものを感しない。海外が盛ればいつでも海外に出る心の準備が出来ているように感じた。海外へ留学する学生として優秀な人材が出ていたが、帰国後、ケニア国のためを考えている人は、どれくらいいるのかと疑問を持ってしまふ。

## ⑨ ストリートの生活

ストリートでの生活は、周旋と危険で一歩である。それは各自が所属する階級りの力関係に左右される。年長者は年少者にシンナーを売ることを強要し、その売り上げは年長者が取る。もし強要を断れば、その時からその地域へは足を踏み入れられなくなる。これは年少者にとって生活の糧（小遣金や食費にも充てる）を失うことを意味する。紛いして得た小遣も年長者が奪い上げる。少女達にもこの力関係は同じように影響する。彼女達には年長者の配偶者としての地位もあり、同時に死傷も強要される。また、彼らの世界の外からも危険がくる。身分不明者の不審物から拘留され、何の分りもないまま刑務所に送り込まれる。大抵から身体に火を付けられたり、投石されたりして死亡、または身体に障害をきたされる。このように人間が人間のうぶ勝らしとして行うものがある。

## 10) その他

スワヒリ語を覚える余裕はなかったが、以下、よく使ったものだけを挙げておく。

1. ハベリ、ヤコ	How are you ?	(おはよう、こんにちは、こんばんわ)
2. ムズリ (サナ)	Pa fina.	(元気です)
3. キドゴ	A little.	(少し)
4. バド	Not yet.	(まだ)
3. トクオナーネ	See you.	(またね)
4. ケシヤク	Tomorrow.	(明日)
7. ウナタカ チャイ	Do you wait some tea ?	(紅茶がいいですか)
8. ニナタカ タニユリ	I want to drink.	(飲みたいんです)
9. カハラ	Coffee.	(コーヒー)
10. チャイ	Tea.	(紅茶、緑茶(グリーン): 標に「箱の下」)
11. マジ	Water.	(水)
12. バリディ	Cold.	(冷たい)
13. キジロ	Spoon.	(スプーン)
14. アサンテ (サナ)	Thank you.	(ありがとう)
15. サラマ	OK!	(ご心配なく、ありがとう)
16. ララ サラマ	Good night.	(おやすみ)
17. ボレボレ	Slowly.	(ゆっくり)
18. ボレ (サーナ)	Sorry.	(ごめんなさい)
19. ムゼー	(相當する日本語はない)(卑の男性に対して尊敬の意を含む)	(外人、特に「白人」)
20. ムズンダ	Nothing.	(無い)
21. ハクナ	No problem.	(問題ない)
22. ハクナ マタタ	Money.	(お金)
23. ベク	Yes.	
24. シンディオ	No.	
25. ハバナ	Isn't it ?	
26. シンディオ	Where ?	(どこ?)
27. ワビ	What ?	(何?)
28. ニニ	What ?	(何?)
29. ニヤマ	What ?	(何: 牛、羊、牛などの肉)
30. ニヤマ チョマ	Wait.	(待て!)
31. ゴジャ	Come!	(来い!)
32. タジャ	Here.	(ここ)
33. ハバ	I don't know.	(知らない)
34. シジューイ	Father.	(お父さん)
35. ババ	Child.	(子供、赤ちゃんをいうこともある)
36. ムトト	I like.	(好き (物に対して))
37. ナベンダ	I like.	(好き (人に対して))
38. ナクベンダ	Welcome!	(ようこそ、どうぞどうぞ)
39. カリブ	You.	(あなた)
40. ウエリエ	Do that!	(早くしなさい!)
41. フアエヤ ハラカ	Whose is your father ?	(お父さんはどなた?)
42. ババ ニコ ワビ	Danger!	(危険!)
43. ハカリ		

※ これは言葉ではないが、人を呼ぶ時に「クスツクッ！」という、大きな声をあげなくても遠くまでよく通る。因みに、これはエジプトでも使われていた。

## B. サファリ

8月、8月、12月頃になると、観光客は日本からの観光客が増える。特に、空路から一陸水ゲル、ホテルからサファリへ。そして、期間という期間であればケニアの印象は素晴らしいリゾート地かも知れない。人は親切で自然も美しい。気候もよく、食べ物も美味しい。しかし、それはケニアがお金を落としてくれる外国に対して見せる顔である。

ただ、田舎へ行けば、サイロではあまり見られない人の温かさに触れる機会はずいぶん多いが、

## 9. 国際協力事業団(JICA)の派遣専門家として

何の経験もなく、プロジェクトの目標を期限内に達成することは不可能であると感じた。同じ内容の経験でも、何時間もお互いの考えをぶつけ合うということが必要であり、また、自分の所属機関を背負って「これ以上、入ってくるとは嫌ですぞ! (不親切な表現をお許し下さい)」という苦情も絶対に必要であると感じた。ただし、これは仕事に限らず、私生活をも含めてである。

## ※ NYS 技術学院

N.Y.S.E.I (National Youth Service Engineering Institute) が正式名称。電気、電子、機械、自動車、建設機械の5科があり、学生数は1クラス30名、3学年で計90名である。セカンダリースクール卒業後、1年間(以上)の寄宿制研修、入学する。NYS 所属派遣職員は他にもあるが、NYSIE は、施設、学カレベルともに最高の機関であり、教員生のほとんどが本学に入学を希望している。従って、入学はセカンダリー卒業時の成績順になる。

本学院は、日本の援助によって建てられ、これまで10年間のプロジェクト方式技術能力がなされ、約20名の長期専門家、17名の短期専門家が派遣されている。1997年現在の段階では9名の長期日本人専門家が関わっていた。当初、学院運営どころか授業や実習が殆ど行えない状態から、一応それらがなされるまでになっている。

具体的な日本人専門家の任務は、各ケニア人スタッフ(カウンターパート)に対して、授業、実習、実務の知識、技術からシラバス(教育課程)、卒業時の国家試験の内申書作りと授業計画、卒業・卒業論文など多岐にわたる指導および援助である。

## 10. おわりに

途上国のことを考えるとき、「ある経済学者が『援助には、冷めた頭と熱い心が必要』と言った」そうだが、これが非常に難しい。こちらが本気になればなるほど彼々にして逆に逆になってしまう。しかし、これは何も途上国に限ったことではない。教育の現場を考えると、それがどこであって何を考えるに値しない。

改めて、教育とは、拙学力をつけること、広い意味で言えば、サバイバル能力をつけること、だと考えるようになった。そして、そのためには自分自身の成長が不可欠だと実感した。生平かなげちよりの考えは一掃しなければならぬ。

初めての現場途上国の暮らしは、これまでの日本の生活を改めて考えさせられ、今後の人生観を大きく左右することになりそうである。車の河原の石積みのような仕事に何年も何十年も熱い心の灯を燃やし続ける人に会えてよかった。ケニア人教師の中にも、熱血漢教師がいることが分かってよかった。そして短い期間ではあったがそれらの人と本音で楽しく付き合えてよかった。そして何よりもアジア、欧米とは、全く違ったアフリカの一隅を風で感じることで生きて本音によかったと思っている。

その機会を与えて下さった、神戸市教育委員会、文部省およびJICA関係者の方々、そして、神戸市立神戸工業高等学校校長、本館編集長、同校、入田久夫様に改めて感謝したい。

## 参考文献

- 『通訳科職員ハンドブック』(改訂版)、1998年12月発行、井ノ原 卓(通訳科シニア)
- 『Bevo the Children Centre』(97年ふれあい祭り) 厚木資料より、久保田幸子監
- 『JTB ポケットガイド』(ケニア・南アフリカ)、1996年11月初版発行(JTB)

B1506,University Tower Cono,28,Jalan University,Section11,46200 Petaling Jaya, Selangor, Malaysia (Tel & Fax) + 60-8-764-7121( from overseas) (E-mail) kweishi@pc.jaring.my

マレーシア通信は、今回をもって最終といたします。2年間にわたり、取り留めのないことを書き、送り届けられ、読んでもらって、大変の恵文に御礼申し上げます。

2月21日、野村一彦様マレーシア日本関係者協会大会を迎えての終了式が執りなされました。1年生による2年生を導く見学会も、昨年同様大変盛り上がりの中、臨んでおりました。終了式の予行、終了式当日の進行をするという大変な仕事に忙しきり合っています。これで私のマレーシアでの任務は全て終わりました。

通信の今回は、言葉に対して持つイメージからのマレーシアと日本の比較です。両国の対象は、高校三年生の当たる年齢の生徒、日本それぞれ約150人づつです。本コースの日本語科の専門家が中心となり、日本各地の高校へ協力依頼を頼み、協賛の協力で行う形で実施したものです。神戸市内にある高校にも協力していただきました。

まず「国」に対しては、マレーシアの生徒は、美しい・気持がいい・物の量が多い・プラスイメージが多く、日本の生徒は、汚い・暑い・うっとうしい・悪いと、マイナスイメージが多いようです。これは、マレーシアの国が近い日中に2時間ほど滞在して来たことと、日本の国・悪徳ということから想像されるものでないでしょうか。

「食」に対しては、マレーシアの生徒は、最初に飲ませてくれる国の甘いデザートである人というイメージを持つマイナスイメージの国はできません。これに対して、日本の生徒は、多量多量で一言でも表現しにくく、暑い・たのしい・美味しい・やる気満々などのプラスイメージ、暑い・うっとうしい・うるさい・遅い・うそつきとマイナスイメージの国はほぼ同数の割合です。最近の日本では、普通に「X」をつけただけで「ひどい、苦しい」という表現もあるという新聞記事が朝日新聞にありました。また、バクフライナイトによる事件の多発といった時代の生徒の現状を見ると、この結果をそのまま受け取ることはできないにしても、食事はしきりに個人的是に思っています。

「外国人」に対しては、マレーシアの生徒からは、考え方が違う・普通・ヨーロッパ人・バンダラナッシュ人という国が、日本の生徒からは、大きい・強い・高貴・日本人・英語・カッコいい・鼻が高い・食費というようになっています。この違いは、明らかに多民族国家マレーシアと異なっていた日本の違いが表れています。マレーシアの生徒は、「考え方が違う」と思われ、その対象は他のアジアの国、国産に及んでいるようです。それに対して、日本の生徒からの答えは、外国人=欧米人のイメージです。マレーシアの生徒が、「普通」であって特別の存在とは感じないのに対して、「悪い」と日本の生徒は感じています。年に一度、両々の生徒と日本の高校生との交流会を実施しています。日本語学習にいい結果をもたらすだろうとの主旨から実施しています。交流の機会を作るために、日本それぞれの国を訪問している時、日本の女子高校生が「何か悪い」と悪いながらも出てきたことがありました。国際理解や異文化理解が叫ばれ、アジアに目を向ける重要性が強調されている今日です。どう思われますか？ただ、この高校生は2 時間ほどの滞在交流会で打ち明けたようで、この交流会は予定時刻をはるかにオーバーしてしまいました。この高校生は行先決したアンケートでは、ただの観光旅行ではなく、ここでの交流会が大変よかったという感想が大層を述べたことと、国際理解やアジアの人達との交流の重要性、これらは、事前や事後からの説明ではなく、実際に人と人が触れるところからの理解でなければいけないのではないかと思えます。

「仕事」に対しては、楽な・平穩・楽しい・最良の人といふ・価値もどがマレーシアの生徒のトップ5です。日本のトップ5は、楽しい・お金・健康・結婚・仕事です。楽しいと価値は共通です。マレーシアの生徒の挙げた、「健康」「平穩」に対して、日本の生徒が挙げた、「お金」「仕事」をどう考えられますか？

いくつか質問を挙げましたが、これ以外にも「国」「白」「健康」「自由」など30 題の国名や事柄について調査しています。興味があれば、ご連絡下さい。

私は、ここでの仕事が終わった今、マレーシアでもう少しやってみたいという思いと、もう十分に早く日本に帰って日本の仕事をしたいという思いが交差して複雑な心境です。ここで考えたことを列挙すると、本自身の社会科学に対する関心の高さ、高知の目で社会科学を見る必要性、専攻の教師といえども関係や社会などに対する意識の高さ、コミュニケーション能力、日本や日本への再関心、日本とは？、アジアとは？、一面を見て全体を見る危険性、……。しかし正解がなかったわけではありません。問題に気がついたという段階です。どう考えを見つめ、教育の現場でどう実践するか、少し気が付くのが遅すぎた感がありますが、遅ってみたいと思えます。

この調査では、多くの体験をすることができました。マレーシアや日本の様々な方との出会いがありました。日本については、感じられなかったことを感じ、考えもしなかったであろうことを考えることが出来ました。インターネットの様々な利用方法も調べ、マレーシアの風景やここでの出来事を書き取ったホームページも<http://www.geocities.com/Boardland/Boardland/11588/>に開設することが出来ました。

すばらしい機会を与えていただいた文部省・兵庫県教育委員会、そして暖かく送り出してくれた加古川北高校の職員の方々に感謝しつつ、マレーシア通信を終了いたします。